

フランチェスコ・デイ・ジュリアーノ・デ・メディチの駐在員帳簿  
—— フィレンツェ・オスマン貿易に関する新史料 ——

The Account Book of Francesco di Giuliano de' Medici :  
A New Document about the Florentine Trade with the Ottoman Empire

鳴野 洋一郎

KAMONO Yoichiro

## はじめに

一橋大学社会科学古典資料センターのフランクリン文庫は、アメリカで古典文献の復刻版を出していたバート・フランクリン（1903-1972年）が収集した膨大な蔵書を、彼の死後に一橋大学が「三井グループ」と国の援助を得て購入したものである<sup>1</sup>。この文庫は図書やパンフレット類などさまざまな種類の資料を所蔵するが、筆者にとってとりわけ興味深いのは600点にも及ぶ貴重なマニュスクリプトである<sup>2</sup>。文庫のマニュスクリプトは中世から近世にかけてヨーロッパで記録されたさまざまな史料を含んでおり、前近代のヨーロッパ史を研究するうえで重要な史料群となっている。

これらのマニュスクリプトのなかに、「メディチ家帳簿」と呼ばれる1冊がある<sup>3</sup>。この帳簿はセンターのウェブサイトにおいて「フィレンツェの大商人であるメディチ家が用いた帳簿」と紹介されている<sup>4</sup>。フィレンツェの経済史を専攻する筆者はこの「メディチ家帳簿」の存在を知り、センターにおいて閲覧・撮影する機会を得た。そして帳簿の内容を丹念に解読し、すべての内容を転写した。

その結果、筆者はこの帳簿がフランチェスコ・デイ・ジュリアーノ・デ・メディチという人物がオスマン帝国で記録した駐在員帳簿であると確認した。15世紀半ばから16世紀半ばにかけ、フィレンツェはオスマン帝国との間で活発な貿易を展開する<sup>5</sup>。このメディチ家のフランチェスコもオスマン貿易を行うためにオスマン帝国のペラやブルサに滞在し、そこで行った取引

<sup>1</sup> フランクリン文庫が一橋大学にやってきた経緯については、都留重人「“Burt Franklin Collection-Donated by Mitsui Group Companies”入手の経緯」、一橋大学編『一橋大学附属図書館史』（一橋大学、1975年）所収、239-246頁。

<sup>2</sup> 「フランクリン文庫」『一橋大学社会科学古典資料センター』、<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/collection/franklin/index.html>、2016年8月9日閲覧。

<sup>3</sup> 一橋大学社会科学古典資料センター、Franklin 18148, MS. 74, *Debit and Credit Account Book, 1471-72*。以下では*Debit and Credit Account Book*と略記。

<sup>4</sup> 「メディチ家帳簿」『一橋大学社会科学古典資料センター』、<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/collection/franklin/book02.html>、2016年8月9日閲覧。帳簿に添付される資料から、ここでの解説は清水廣一郎氏によるものと思われる。

<sup>5</sup> 鳴野洋一郎「15世紀後半におけるフィレンツェ毛織物会社のオスマン貿易 — グワンティ家の経営記録から」『史学雑誌』（第122編第2号、2013年）、42-65頁をはじめとする鳴野の諸論文を参照。

などの詳細を駐在員帳簿に記録した。その帳簿こそが、一橋大学に所蔵される「メディチ家帳簿」なのである。筆者はこれまでフィレンツェ・オスマン貿易を研究してきたが、この「メディチ家帳簿」は筆者の研究テーマに最も深く関わる一次史料だといえることができる。後述するように、フィレンツェ・オスマン貿易に関する同種の史料は少なく、きわめて貴重な史料がわが国に残されていることに筆者は驚いた。

そこで本稿では、フィレンツェ・オスマン貿易の新史料となるこの帳簿の内容を、帳簿が作成された歴史的背景とともに紹介したい。まず帳簿の特徴を述べ、そこから帳簿がフランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・デ・メディチの駐在員帳簿であったと特定する。次に、このフランチェスコ・ディ・ジュリアーノという人物について紹介する。その後、帳簿の内容を詳しく検討していく。本稿の目的は、わが国にルネサンス期フィレンツェ商業の一端を解明する重要史料があることを周知し、今後筆者がこの帳簿を研究するにあたり必要な予備知識を整理することにある。

## 1. 「メディチ家帳簿」の特徴

ではまず、フランクリン文庫の1冊となっている「メディチ家帳簿」の特徴をまとめておこう。

帳簿の大きさは、筆者による実測では、縦 21.5 cm・横 15.2 cm・厚さ 2.0 cmである。この大きさは、当時のフィレンツェの会計帳簿としては一般的であるが、毛織物会社などの総勘定元帳に比べると小さい。次に帳簿の素材を見ると、表紙は羊皮紙で、それ以外の部分は厚手の紙となっている。一般にフィレンツェの帳簿は、表紙の部分と記録する中身の部分とで素材が異なっており、この帳簿の場合も例外ではない。ただ総勘定元帳のような大きな帳簿が厚手の牛皮を素材とし、金箔などで飾られ、革のベルトで閉じられていたことを考えると、この帳簿の表紙はととても簡素だといえる。後述するように、帳簿がこうしたサイズや形状だったのには理由があった。

では、この帳簿はだれが、何の目的で記録したものでしょうか。まず帳簿を記録した人物について、前述のウェブサイトでは「傍系のフランチェスコ」と説明されるが、いまいちど史料からはっきりさせておこう。

そのための1つ目の手掛かりは、表表紙にある記載である。ここには「1471年 フランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・(デ・)メディチ」(括弧内は筆者)と書かれてある。筆跡が中身のものとは異なり、15世紀の一般的な筆跡とも違うので、これは後になって書き込まれたものだろう。いずれにしてもこの記載は、帳簿が15世紀後半にフランチェスコ・ディ・ジュリアーノというメディチ家の人物によって書かれたことを示している。ただ表紙には、フランチェスコが書いたと思われる署名や印などはない。

2つ目の手掛かりは、表紙をめくって出てくる最初の頁にある<sup>6</sup>。ここで記録者は当時の帳簿で慣例だったようにまず神やイエス、諸聖人らの名前を列挙する<sup>7</sup>。そして帳簿が「フランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・ディ・ジョヴェンコ・デ・メディチ」のもので、「借方・貸方、備

---

<sup>6</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 1d.

<sup>7</sup> そして彼らに対し、船舶や商品の安全とともに利益 (*guadagno*) をもたらしてくれるよう懇願している。

忘録 (Debitori e Creditori e Ricordanze) A号」と呼ばれると書いた。この記述から、帳簿がやはりメディチ家のフランチェスコという人物のものであり、複式で記録され(「借方・貸方 (Debitori e Creditori)」)、ある目的のために初めて記録された(「A号」)ものだったことがわかる。一般にある会社やある商人が帳簿に記録する場合、最初の帳簿をA号とし、次の帳簿をB号、その次をC号とアルファベット順に帳簿を用意し、記録していった。

さて、最初の頁から帳簿の記録者は確認できた。では、この帳簿はどのような目的で記録されたのだろうか。これを知るには、帳簿の内容を見ていかなければならない。

内容は大きく、前半の複式簿記の部分と後半の備忘録の部分とに分かれる<sup>8</sup>。複式簿記の部分には、さまざまな勘定が設けられ、それぞれの勘定につき左に借方、右に貸方の各項目が記録された。ただ項目が多すぎて片方の頁に書ききれない場合、反対側の頁にはみ出すこともあった。

複式簿記の部分を通覧して気付くのは、記録の際に使われた貨幣の単位である。記録の最初では、フィオリーノ金貨や「リラ」、「ソルド」、「デナロ」といったフィレンツェの帳簿でなじみある単位が見られる。しかしまもなくこれらの単位は姿を消し、「d.」や「asp.」といった記号で書かれた単位が登場する。筆者はこれらの記号を見たとき、これまでさまざまな帳簿に対して行ってきた調査の経験から、この帳簿がフィレンツェ商人によってオスマン帝国で記録されたものと推測した。当時オスマン帝国では、ドゥカート (ducat) 金貨やアクチェ銀貨(イタリアでは「アspro (aspro)」と呼ばれる)が流通していた。フィレンツェ商人がオスマン帝国で帳簿をつける際、これらの通貨単位をそれぞれ「d.」や「asp.」という記号で表し、取引の内容を記録していた<sup>9</sup>。そこで、フランチェスコの帳簿も彼がオスマン帝国に滞在して記録したものと考えたのである。

これを裏付けるのが、勘定項目として登場する商人の名前である。後述するように、これら商人の名前には「トルコ人」やユダヤ人だと思われるものがある<sup>10</sup>。これは、フランチェスコがオスマン帝国において現地の商人を相手に取引していたことを示唆している。こうして筆者はこの帳簿がオスマン帝国で記録されたものとほぼ確信し、帳簿の内容をすべて解読した。その結果、フランチェスコの足取りを細かく再現でき、彼がオスマン帝国で毛織物の販売やペルシア生糸の購入を行っていたことを確認できた。

フランチェスコが残した帳簿は、駐在員帳簿と呼べるものである。駐在員帳簿は、フィレンツェの会社から商品を委託されて国外に滞在するフィレンツェ商人が、現地での取引を細かく記録した帳簿である。彼らはフィレンツェを離れて遠隔の都市で滞在し、そしてフィレンツェに帰ってくるまで、この駐在員帳簿を常に携行した。そして旅行中に行った支出や収入をこの帳簿に逐一記録した。そのため筆者がすでに見ているほかの駐在員帳簿は、必然的にポータブルなものとなっている。前述のように、フランチェスコの帳簿は比較的小さく簡素である。これも、この帳簿の駐在員帳簿としての性格を反映してのことだろう。

なおフランチェスコの駐在員帳簿のうち、後半の備忘録の部分には、フランチェスコが行っ

---

<sup>8</sup> 複式簿記の部分は *Debit and Credit Account Book*, cc. 2s-26d, また備忘録の部分は cc. 48r-65r.

<sup>9</sup> たとえば、バルトロメオ・グワンティの駐在員帳簿を参照。Archivio di Stato di Firenze, *Corporazioni religiose soppresse dal governo francese*, 79, 208.

<sup>10</sup> メディチ家文書がロンドンでオークションに出された際に作成されたカタログにも、本稿の帳簿と同一と見られる文書(519番)がトルコ人やユダヤ人の名前を含む、と書かれてある。駐在員帳簿に添付されるカタログのコピーを参照。

た業務に関するメモのほか、彼がやり取りした書類の写しが記録された。書類の写しには、フィレンツェの会社が駐在員のフランチェスコに送った「業務委託契約書」やフランチェスコがオスマン帝国内の別の商人に渡した同様の書類、彼がこうした人々とやり取りした「抜粋勘定書」や書簡、そして彼が受け取った毛織物の種類を列挙した「商品送り状」といったものがある。フランチェスコは駐在員としての業務を遂行する間、これら多様な書類を通じてさまざまな人々とコミュニケーションを取っていた。駐在員帳簿はこうしたネットワークのあり方についても、具体的に教えてくれる<sup>11</sup>。

フランチェスコの駐在員帳簿は、白紙の頁を除くと前文が1頁、複式簿記の部分が50頁、備忘録の部分が30頁で、総勘定元帳などの大きな帳簿と比べると頁数は少ない。また記録された期間は1471年7月ごろから翌72年の12月ごろまでと推定され、長期にわたる記録とはいいがたい。だが含まれる記録の数々は、フィレンツェ商人がオスマン帝国内で行った商業活動の詳細を伝えている。オスマン帝国におけるビジネスの内容を記録した駐在員帳簿は、筆者が把握するかぎり、これまで5冊しか見つかっていない。このたびわが国で確認できた駐在員帳簿は、これらの帳簿に新たに加えられるべき貴重な史料となるだろう。

## 2. フランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・デ・メディチとオスマン帝国

前章では、フランクリン文庫の「メディチ家帳簿」がフランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・デ・メディチの駐在員帳簿であると特定した。そこで本章では、このメディチ家のフランチェスコについてわかっていることを簡潔にまとめ、彼と彼が滞在したオスマン帝国とのつながりの背景を考えてみたい。

フランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・デ・メディチは、その名の通りメディチ家に属する人物だった。ただ彼は、ルネサンス運動のパトロンとして有名なコジモ・イル・ヴェッキオやロレンツォ・イル・マニフィコの家系ではなく、彼らの遠戚にあたる一族のメンバーであった。すなわち、コジモ・イル・ヴェッキオの曾祖父キアリッシモの兄ジョヴェンコの子孫（本論では彼らを「ジョヴェンコの家系」と呼ぶ）であり、代々毛織物工業を営む人々であった。

彼ら「ジョヴェンコの家系」が行った毛織物工業に関する史料は、アメリカのハーヴァード大学ペイカー図書館に大量に保管されている<sup>12</sup>。彼らの末裔は第一次世界大戦が終わるまでこれらの史料を数百年にわたり守ってきたが、戦後ロンドンでオークションに出しアメリカ人実業家H. G. セルフリッジに売却した。その後ハーヴァード大学がセルフリッジからこれらを借り受け、「ジョヴェンコの家系」の史料群（メディチ家文書）が大西洋を越えてアメリカ東海岸に渡ることとなった。

筆者は別稿にて、このメディチ家文書を調査したF. エドラー・ド・ルーヴァによりつつ「ジョヴェンコの家系」を取り上げ、彼らと毛織物工業との関係を説明することにしている<sup>13</sup>。ここではその要点のみを押さえ、本稿と関わるフランチェスコについて紹介しておこう。

---

<sup>11</sup> このネットワークのあり方については、別稿で詳述する予定である。

<sup>12</sup> Boston, Harvard University, Baker Library, *Selfridge Collection*, MS. Mediciに含まれる一連の史料群である。

<sup>13</sup> エドラー・ド・ルーヴァの研究は、F. Edler de Roover, *Glossary of Mediaeval Terms of Business. Italian Series 1200-1600* (Cambridge, Mass.: The Mediaeval Academy of America, 1934). これは「用語集」ではあるが、巻末の付録に「ジョヴェンコの家系」に関する詳しい説明がある。

まず1431年にジョヴェンコの曾孫にあたるベルナルド・ダントーニオは、兄弟のジョヴェンコや従兄のジョヴェンコとともに出資して毛織物会社を設立した<sup>14</sup>。ベルナルドはその後毛織物会社の出資者としてたびたび毛織物工業と関わり、また彼とともに出資者となった従兄のジョヴェンコは会社の経営も担っていく。そしてこのジョヴェンコから、ジュリアーノ、フランチェスコ、ラッファエッロと続く3代のメンバーが登場し、彼らは兄弟や親戚らと協力しつつ毛織物工業を継続させ、この工業を同家の家業とした。ここで出てくるフランチェスコこそが、本稿で取り上げる駐在員帳簿を記録した人物であった。

なお、いわゆる「本家」となるコジモやロレンツォが経営した「メディチ銀行」のなかにも毛織物を製造する会社はあった。しかしR. ド・ルーヴァによると、「本家」の人々は国際金融業・商業に比べてこの部門に積極的に関わらず、また利益におけるシェアも小さかったという<sup>15</sup>。他方で「ジョヴェンコの家系」は毛織物工業を家業としてこれに積極的に携わり、自社製品の販売も展開した。そして15世紀半ば以降は製品の重要な販路としてオスマン帝国に着目し、メンバーみずからが帝国に駐在して毛織物の販売を行った。メディチ家のビジネスというとヨーロッパにおける教皇や君主などへの高利貸し付けというイメージが強い。しかし、製造業に精を出し東地中海のイスラーム世界とつながるメディチ家の人々もいたのである。

さて「ジョヴェンコの家系」の1人で駐在員帳簿を記録したフランチェスコ・デイ・ジュリアーノは、前述のように同家の毛織物工業を率いる重要人物であった。フランチェスコは1450年に生まれ（ロレンツォ・イル・マニフィコと同世代）、1469年12月から父ジュリアーノの毛織物会社で働きはじめ、翌年にビジネス上の契約を自由に結べる身分となる<sup>16</sup>。そして二十歳を過ぎて間もない1471年7月、父の会社の駐在員としてオスマン帝国に向けて出発し、少なくとも翌年の5月までは帝国に滞在して毛織物の販売や東方物産の購入を行った。このとき記録されたのが本稿で取り上げる駐在員帳簿である。帰国後フランチェスコは、毛織物ビジネスから一度離れ地元の銀行業や宝石販売に従事する<sup>17</sup>。しかし1491年から再び毛織物ビジネスに参加し、16世紀に入ると毛織物の製造のみならず販売も大規模に行った<sup>18</sup>。

すでに「ジョヴェンコの家系」は毛織物の販路としてオスマン帝国に注目していたが、フランチェスコはかつて駐在員として滞在したことがあるこの市場をとりわけ重視した。それを示すのが、1506年10月1日に設立された毛織物会社である<sup>19</sup>。この会社は出資者にオスマン貿易商のジョヴァンニ・マリングを迎え、毛織物の製造およびそのオスマン帝国での販売を主たる業務とした。会社は翌年のマリングの死により中断したようだが、その後もフランチェスコは毛織物製造・販売を長きにわたり継続させていく。晩年は息子ラッファエッロを社名とする毛織物会社を数回つくり、経営を監督しつつ、息子に帳簿や書簡をつくらせ経営のノウハウを

---

<sup>14</sup> Edler de Roover, *Glossary of Mediaeval Terms of Business*, pp. 337-339.

<sup>15</sup> ド・ルーヴァによる「本家」の毛織物工業の説明は、R. de Roover, *The Rise and Decline of the Medici Bank, 1397-1494* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1963), pp. 167-193.

<sup>16</sup> R. A. Goldthwaite, 'The Return of a Lost Ledger to the Selfridge Collection of Medici Manuscripts at Baker Library', *Business History Review*, 83 (Spring 2009), 165-171 (p. 169).

<sup>17</sup> Goldthwaite, 'The Return of a Lost Ledger', p. 169.

<sup>18</sup> Edler de Roover, *Glossary of Mediaeval Terms of Business*, pp. 344-345.

<sup>19</sup> 設立に際して定められた規約は英訳されている。G. R. B. Richards, *Florentine Merchants in the Age of the Medici. Letters and Documents from the Selfridge Collection of Medici Manuscripts* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1932), pp. 240-245.

伝えた<sup>20</sup>。これらの会社も、駐在員を通じてオスマン帝国で毛織物を販売した。フランチェスコは1528年に病没するが、それまでオスマン帝国と深く関わりながら毛織物ビジネスを展開したのである。

このようにフランチェスコの生涯を辿ると、本稿で取り上げる駐在員帳簿の重要性が見えてくる。彼は後半生を毛織物の製造・販売に捧げたが、その重要な布石となったのが二十歳過ぎに経験したオスマン帝国でのビジネスだった。短期間ながらもここで得たオスマン貿易の経験は、15世紀末から参加した毛織物工業や16世紀に入って熱心に行ったオスマン貿易に活かされたはずである。1471年から72年まで記録されたフランチェスコの駐在員帳簿は、彼の織元またはオスマン貿易商としての活動の原点に位置づけられるものだろう。

ところでメディチ家文書がハーヴァード大学にまとまっているにも関わらず、なぜフランチェスコの駐在員帳簿は一橋大学に所蔵されているのだろうか。前述のように、フランクリン文庫はアメリカの出版業者バート・フランクリンの蔵書を一橋大学が購入したものである。するとメディチ家文書がまずハーヴァード大学に入ったのち、この駐在員帳簿だけは何らかの経緯で大学からフランクリンのもとに移ったのかもしれない<sup>21</sup>。いずれにしても、一橋大学がフランクリンの蔵書を購入しなければ、蔵書は彼の死後ニューヨークのオークションに出され分散してしまっただろう<sup>22</sup>。それを考えると、この駐在員帳簿が現在まで伝来し利用できることは、いくつかの幸運が重なった結果だといえる<sup>23</sup>。

### 3. 諸経費からわかるフランチェスコ・ディ・ジュリアーノの活動

では本章と次章で、フランチェスコ・ディ・ジュリアーノの駐在員帳簿の具体的な内容を検討してみよう。駐在員帳簿の内容の大半を占めるのは、フランチェスコないしその代理人がオスマン帝国内で行ったフィレンツェ毛織物の販売および東方物産の購入に関する詳細である。これらの取引はオスマン貿易の主軸であり、それゆえ多くのスペースを割いて記録されている。これについては次章で論じることとし、本章では帳簿で記録された諸経費に注目したい。

駐在員帳簿には、フランチェスコがオスマン帝国に向かい、そこで駐在員として滞在する間にかかったさまざまな経費について、細かな記録が残されている。移動および滞在にかかる諸経費は、取引のための経費として会社が負担したからである。そしてわれわれはその諸経費の記録から、駐在員としてのフランチェスコの行動をある程度詳しく再現できる。そこで取引の内容を見る前に、以下でこの諸経費を頼りに彼の足取りを辿ってみよう。

まず、フランチェスコは1471年7月下旬にオスマン帝国へ向かうためフィレンツェを出発

---

<sup>20</sup> Edler de Roover, *Glossary of Mediaeval Terms of Business*, pp. 345-346.

<sup>21</sup> フランクリン文庫のカタログには、フランクリンがハーヴァード大学ペイカー図書館の人物に書籍を販売したとある。Hitotsubashi University Library, *Catalogue of the Burt Franklin Collection - Donated by Mitsui Group Companies*, preliminary edition (Tokyo: Hitotsubashi University, 1978), p. x. このとき、フランクリンがメディチ家帳簿を入手した可能性は考えられる。

<sup>22</sup> 都留「“Burt Franklin Collection-Donated by Mitsui Group Companies”入手の経緯」239頁。

<sup>23</sup> 最近R. A. ゴールズウェイトは、同じフランチェスコ・ディ・ジュリアーノが若いころと晩年に記録した1冊の会計帳簿をドイツで見つけた。Goldthwaite, 'The Return of a Lost Ledger'. おそらくこれは、メディチ家文書がロンドンからハーヴァード大学へと移動する間にはぐれ、ドイツで保管されてきたのだろう。

した。出発に際し、彼は衣服のための布と1足の長靴を調達している<sup>24</sup>。ピサまでは馬で移動し、8月5日にガレー船でピサ港を発った。その後、ガエータやナポリを經由して8月下旬にイタリアを離れ、9月初旬にはロードス島にも滞在している<sup>25</sup>。フランチェスコはイタリアを離れる前に上着や靴下、ひも、布団、小刀、インク、小さな靴など旅行に必要なものを買ひ、また衣服を洗濯し散髪もすませた<sup>26</sup>。港を転々とするガレー船での移動は9月末まで続くことになる。

続く10月から12月までの3か月間、フランチェスコはおそらくオスマン帝国のどこかの都市に、ピエロ・マッテーイというフィレンツェ商人と滞在したようである<sup>27</sup>。ただ彼が滞在した場所や滞在の目的については、帳簿からあまりはっきりしない。いずれにしてもフランチェスコはその都市で靴やスリッパを買ひ、たびたび床屋に行き、何人かのフィレンツェ人と金銭の授受を行った。また12月24日には、翌日のクリスマスに備えてか、衣服用の各種の布やキツネの毛皮、衣服の仕立て、菓子、散髪などに（会社の経費として）支出している<sup>28</sup>。運んでいた35反の毛織物を倉庫に入れたところを見ると、彼はここでその一部を販売するつもりだったらしい<sup>29</sup>。

しかし、11月末にフランチェスコは毛織物を倉庫から出してガレー船に再び載せ、彼自身は乗船せずにこれをペラに送った<sup>30</sup>。毛織物は1月6日にペラに着き、現地で待機する商人がひとまずこれを引き取る<sup>31</sup>。遅れて1月の初めにフランチェスコは滞在していた都市を離れ、同月末に馬でペラに到着した<sup>32</sup>。備忘録の部分には、ペラで待機する商人に宛てた委託契約書の写しと、1472年1月27日にフランチェスコがこの商人から毛織物を受け取ったとの記録がある<sup>33</sup>。フランチェスコが毛織物をみずからペラまで運ばなかった理由は不明だが、ここに至り彼が駐在員としての仕事をペラで始めようとしていたことは確かである。

ペラにおいて、フランチェスコはフランチェスコ・ウゴリーニというフィレンツェ商人の家に滞在し取引を行った。彼はウゴリーニに対して食費込みの滞在費を1日当たり5アクチェ支払い、使用人にはチップを払っている<sup>34</sup>。この家には4月末まで3か月と3日間滞在し、後述するようなさまざまな取引を行った。またこの時期には業務上必要な経費として、数回の散髪（フィレンツェを離れてからたびたびである）や、小さな靴、靴下、スリッパ、布、印章、くし、インク壺、紙の購入、そして教会への献金などにも支出している<sup>35</sup>。こうしてペラで一通りの取引を終えた後、フランチェスコは4月30日にそこを立ち、ブルサに向かった<sup>36</sup>。彼は船でムダンヤに入り、そこから馬でブルサに着いている。ブルサ滞りの目的は、ペルシア生糸の

---

<sup>24</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 2s.

<sup>25</sup> *Ibid.*, c. 3s.

<sup>26</sup> *Ibid.*, cc. 2s, 3s.

<sup>27</sup> *Ibid.*, c. 3s.

<sup>28</sup> *Ibid.*, c. 10s.

<sup>29</sup> *Ibid.*, c. 8s.

<sup>30</sup> *Ibid.*, c. 8s.

<sup>31</sup> *Ibid.*, cc. 9s-d.

<sup>32</sup> *Ibid.*, c. 3s.

<sup>33</sup> *Ibid.*, c. 49r.

<sup>34</sup> *Ibid.*, c. 3d.

<sup>35</sup> *Ibid.*, c. 10d.

<sup>36</sup> *Ibid.*, c. 49v.

購入に立ち会うことであった<sup>37</sup>。この取引のほか、フランチェスコはここで1頭の馬や帽子、小刀、箱、長靴などを購入し、修道士に献金している<sup>38</sup>。ただ、彼はブルサにそれほど長く滞在しなかった。帳簿の記録から、おそらく彼は5月中には購入した生糸とともにアルバニアのヴローラへ向かい、7月にはオスマン帝国を離れプーリア経由でナポリに至ったと考えられる<sup>39</sup>。

このように諸経費の記録からフランチェスコの行動を探ると、彼は取引の拠点であるペラにほぼ3か月しか滞在しなかったことに気付く。他の駐在員は数年間オスマン帝国内に滞在し、毎年100反程度の毛織物をフィレンツェから受け取りつつ販売することもあった<sup>40</sup>。これに対しフランチェスコの滞在期間は短く、また販売した毛織物も最初にオスマン帝国に持ち込んだもののみであり、滞在中に追加の毛織物を受け取っていない。彼が行ったのはオスマン帝国における「駐在」というより、むしろ帝国への「旅行」に近かった。つまり、フランチェスコは中長期的な展望のもとに派遣された駐在員ではなかったのである。

まだ二十歳を過ぎて間もないフランチェスコは、父ジュリアーノが展開するビジネスの世界によりやく足を踏み入れたばかりであり、まず外の世界でビジネスの現場を学んでくる必要があった。それゆえ父ジュリアーノは、息子フランチェスコが外での経験を積めるよう、彼を父の毛織物会社の駐在員としてペラに派遣したのだろう。ただもちろん、父ジュリアーノは慣れない息子にのみ遠隔地での取引を任せることはしなかった。前述のピエロ・マッテーイというフィレンツェ商人がフランチェスコの「旅行」に同行し、彼の取引をサポートしていたのである。彼らのビジネス上の関係については、別稿にて詳しく検討することにしたい。

#### 4. フランチェスコ・ディ・ジュリアーノによる取引

では次に、フランチェスコが行った取引について見ておこう。最初に、毛織物の販売である。フランチェスコは、父ジュリアーノの会社から受け取った32反の毛織物とフランチェスコ・ディ・ミケーレ・ディ・ベンコの会社から受け取った3反の毛織物を販売するよう指示されていた<sup>41</sup>。毛織物の種類は帳簿で明記されないが、父ジュリアーノの会社がマッジョ通りにあり、毛織物の色が「トゥルキーノ（トルコ風の）」と呼ばれる青系の色や緑系の色だったことから、種類はガルボ織だったと思われる<sup>42</sup>。ガルボ織はサン・マルティーノ織とともに15世紀のフィレンツェ毛織物を代表し、オスマン帝国でよく売れていた<sup>43</sup>。1472年1月末から4月にかけて、彼はこれら35反の毛織物を以下の2つのグループに販売していく。

1つ目は、イスタンブルのベデステン（市場）で店舗を経営する商店主のグループである。フランチェスコは1月28日にユダヤ人商店主「ダヴィテ・イモーゼ・カロミティ」に3反

<sup>37</sup> Ibid., c. 58r.

<sup>38</sup> Ibid., c. 3d.

<sup>39</sup> Ibid., cc. 3d, 21s, 24s-d, 58r.

<sup>40</sup> 前述のバルトロメオ・グワンティは、1484年から約3年間で300反近いガルボ織を販売した。鴨野「15世紀後半におけるフィレンツェ毛織物会社のオスマン貿易」を参照。

<sup>41</sup> *Debit and Credit Account Book*, cc. 48r-v.

<sup>42</sup> Ibid., cc. 64r-v. 青系と緑系を中心とする構成は、バルトロメオ・グワンティが販売したガルボ織の構成と同じである。

<sup>43</sup> ガルボ織については、以下の詳細な研究を参照。星野秀利『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』齊藤寛海訳（名古屋大学出版会、1995年）、247-336頁。

(4000 アクチュ)<sup>44</sup>、2月5日にトルコ人商店主「カイラディーノ」に7反(7000 アクチュ)<sup>45</sup>、2月18日にユダヤ人商店主「ユクーダ・デイ・モディク」に2反(2300 アクチュ)<sup>46</sup>、2月26日にユダヤ人商店主でエディルネ出身の「ユステ」に9反(10375 アクチュ)<sup>47</sup>、そして4月6日にユダヤ人商店主で「サマリア」の息子「ガブリエロ」に2反(2400 アクチュ)<sup>48</sup>を販売した。購入者がすべてベダステンの「商店主 bottegaio」だったことは興味深い。彼らがどのような商人かを帳簿から知ることはできないが、購入した反物を現地の商人に渡す間屋だった可能性は高い<sup>49</sup>。彼ら商店主は、フィレンツェの商業ネットワークがイスタンブルのネットワークとつながる接点であった。また「カイラディーノ」を除く4人がユダヤ人だったことも注目すべきである。ユダヤ人は現地の金融のみならず、商業においてもイスタンブルで重要な役割を果たしていたことがわかる。

2つ目は、エディルネの購入者である。フランチェスコはエディルネでも販売を試みたが、その際同市に拠点を置くドーノ・ドーニの会社に委託するという方法をとった。エディルネでの販売については、ドーノがフランチェスコに送った勘定書の写しから詳細がわかる<sup>50</sup>。それによるとドーノは、4人の購入者(そのうち3人は「トルコ人」、他の1人も名前からおそらくトルコ人)に12反の毛織物(15800 アクチュ)を販売した。35反のうちの約3分の1にあたる12反をエディルネで販売したことは、同市がフィレンツェ毛織物のマーケットとして重要だったことを物語る。実際このころのフィレンツェ商人は、おもにイスタンブル(ペラ)、エディルネ、ブルサの3都市に駐在して取引していた<sup>51</sup>。前の2都市は毛織物の販路として、ブルサはペルシア生糸の調達地として重要だった。

ではこんどは、フランチェスコらがオスマン帝国で行った東方物産の購入について見てみよう。まずペルシア生糸の購入である。ペルシア生糸は、フィレンツェがオスマン帝国から輸入する最も重要な商品となっていた。輸入した生糸は他都市で販売されることもあったが、多くは成長著しいフィレンツェ市内の絹織物工業で使用され、職人の手によって高級な布へと姿を変えた<sup>52</sup>。オスマン帝国におけるペルシア生糸の一大集積地は、アナトリア半島北西部の都市ブルサであった。4月18日にフランチェスコはブルサのバルトロメオ・キリッチの会社に書簡を送り、200リブラの「ストラヴァイ」生糸を購入するよう依頼する<sup>53</sup>。この生糸は、カ

---

<sup>44</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 12s.

<sup>45</sup> *Ibid.*, c. 15s.

<sup>46</sup> *Ibid.*, c. 16s.

<sup>47</sup> *Ibid.*, c. 18s.

<sup>48</sup> *Ibid.*, c. 19s.

<sup>49</sup> R. マントランによると、ヨーロッパの高級織物などの輸入品を扱えるのはベダスタンに商店をもつ商人に限られていた。R. Mantran, *La vita quotidiana a Costantinopoli ai tempi di Solimano il Magnifico e dei suoi successori (XVI-XVII secolo)*, trad. it. (Milano: Rizzoli, 1985), p. 166.

<sup>50</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 54r.

<sup>51</sup> 有名な『年代記 (La Cronica)』を書いたベネデット・デイは、1469年の時点でイスタンブル、ブルサ、エディルネの3都市に51人のフィレンツェ商人がいたと証言する。G. F. Pagnini del Ventura, *Della Decima e di varie altre gravezze imposte dal comune di Firenze, della moneta e della mercatura de' fiorentini fino al secolo XVI* (Lisboa-Lucca: Bouchard, 1765), ristampa (Bologna: Forni, 1967), vol. 1, p. 303.

<sup>52</sup> 以下を参照。鴨野洋一郎「ルネサンス期フィレンツェのペルシア生糸輸入——フィレンツェの経営記録から——」『西洋史学』(第247号, 2012年), 21-37頁。

<sup>53</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 52r.

スピ海沿岸の都市アストラバード（この地名が訛って「ストラヴァイ」となった）辺りを産地としていたらしい<sup>54</sup>。4月30日にはフランチェスコみずからもペラを発ちブルサへ向かった。おそらく彼の立会いのもと、5月4日にバルトロメオはストラヴァイ生糸を購入する。駐在員帳簿にはフランチェスコがバルトロメオから受け取った抜粋勘定書の写しがあり、そこからバルトロメオがこの生糸を12200アクチュで購入し、諸経費を加えて全体で13230アクチュを支払ったとわかる<sup>55</sup>。バルトロメオに生糸を販売した商人については明記されないが、彼はその商人に2か月以内に代金を支払う約束をした<sup>56</sup>。

フランチェスコが購入した東方物産として次に重要なのは、蜜蠟である。これは帳簿で「チエーラ・ザヴォーラ（ciera zavora）」と書かれ、ブルガリアの都市スタラザゴラ（この地名が訛り「ザヴォーラ」となったか）がその産地だったと考えられる<sup>57</sup>。蜜蠟はろうそくなどの原料として重要だった。父ジュリアーノの会社がフランチェスコに与えた委託契約書にも、バーターで取引すべき商品の筆頭に蜜蠟が挙げられている<sup>58</sup>。2月21日にフランチェスコは、「エリア・マルーリ」の息子とされる「ユクーダ」から21カンターロ87ロートの蜜蠟を9840アクチュで購入し、同日イタリアに向かう船に積載した<sup>59</sup>。代金については、2か月以内に支払うと約束した<sup>60</sup>。

フランチェスコが購入したその他の東方物産としては、5枚のキャムレット織（そのうちの1枚は先ほどのバルトロメオ・キリッチから購入）、1枚の絨毯、10枚のブルサ産無地サージがあった<sup>61</sup>。すべて合わせた購入額は1700アクチュ程度であり、これらが購入した東方物産のなかに占める割合はそれほど大きくない。ただこの時代のフィレンツェ商人にとって、山羊とラクダの混紡とされるキャムレット織はフランスでも販売できる重要な東方産織物であった<sup>62</sup>。また絨毯は、当時の絵画にたびたび描かれる舶来品となっていた<sup>63</sup>。フランチェスコは、オスマン帝国における各商品の数量や価格をよく考慮したうえで、バルシア生糸と蜜蠟を中心とする東方物産をフィレンツェに送ろうと判断したのだろう。

フランチェスコは東方物産の購入代金を支払う際、毛織物の販売によって得た代金をそのまま東方物産の販売者に支払うという方法をとった。つまり本国フィレンツェから購入のための金銭をもっていくことなく、いわば製品とのバーターに近い形で東方物産を獲得していた。彼

---

<sup>54</sup> E. Ashtor, "The Economic Decline of the Middle East during the Later Middle Ages. An Outline", in *Ashtor, Technology, Industry and Trade. The Levant versus Europe, 1250-1500* (London: Variorum, 1992), II, pp. 265-266.

<sup>55</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 53v.

<sup>56</sup> *Ibid.*, c. 21d.

<sup>57</sup> F. メリスは史料集の索引において、「cera zagora」や「cera zaora」と史料に書かれる商品がスタラザゴラ産の蜜蠟だったとしている。F. Melis, *Documenti per la storia economica dei secoli XIII-XVI, con una nota paleografica di E. Cecchi* (Firenze: Olschki, 1972), p. 608.

<sup>58</sup> *Debit and Credit Account Book*, c. 48r.

<sup>59</sup> *Ibid.*, cc. 16d, 50v.

<sup>60</sup> *Ibid.*, c. 16d.

<sup>61</sup> *Ibid.*, cc. 21d, 22s, 22d, 57v.

<sup>62</sup> のちにフィレンツェで毛織物製造・販売の指揮をとるフランチェスコは、リヨンの駐在員に宛てた1512年10月31日付け書簡で、リヨンに100枚以上のキャムレット織を発送したことを伝え、高品質なためこれらをすぐに売却できるだろうと書いている。Richards, *Florentine Merchants in the Age of the Medici*, pp. 272-273.

<sup>63</sup> 以下を参照。M. Spallanzani, *Oriental Rugs in Renaissance Florence* (Florence: S.P.E.S., 2007).

は父ジュリアーノの毛織物会社が製造した毛織物や他社の毛織物を運ぶことで、貴金属の輸送という危険を冒すことなく、中世における最重要貿易の1つである「東方（レヴァント）貿易」に参入できたのである。

もっともフランチェスコは毛織物の売上をフィレンツェに戻す際、それを東方物産に変えるのではなく、そのまま現金で本国に輸送することも視野に入れていた<sup>64</sup>。ただ彼はこの現金も、いわば貴金属という1つのモノとしてとらえていたと思われる。前述のようにフランチェスコは駐在員としてオスマン帝国に滞在し、現地市場の動向をよく見極めていた。その際、貴金属を輸送する際のリスクも当然考慮に入れていたはずである。そのうえで彼は、売上を貴金属または他の東方物産のどちらの形でフィレンツェに戻すかということを、随時決定していたのだろう。

## おわりに

以上で検討したように、一橋大学社会科学古典資料センターのフランクリン文庫が所蔵する「メディチ家帳簿」は、フランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・デ・メディチがオスマン帝国で記録した駐在員帳簿であった。彼はこの帳簿に、自身の移動および滞在中にかかった経費やオスマン帝国で行った取引の詳細を日々書き留めていた。それゆえフランチェスコの駐在員帳簿は、他の数少ない駐在員帳簿と同じく、15世紀にフィレンツェ商人が行ったオスマン貿易の実態を証言するきわめて貴重な史料となっている。本稿ではその史料の内容のうち、諸経費に関わるものと取引に関わるものを取り出して紹介した。フランチェスコはオスマン帝国に約3か月という短期間しか滞在しなかったが、彼は現地で毛織物の販売やペルシア生糸・蜜蝋の購入を活発に行っていた。本稿は、その取引の一端を具体的に伝えられたのではないかと考える。

今後は、この貴重なフィレンツェ経済史料であるフランチェスコの駐在員帳簿を使い、フィレンツェ・オスマン貿易の実態にさらに迫っていく。さらには、ハーヴァード大学にあるメディチ家文書も網羅的に調査することで、ルネサンス期にメディチ家が行った毛織物工業およびオスマン貿易の全貌を明らかにしていきたい。

[本研究はJSPS科研費JP26780198の助成を受けたものである。]

[2016年11月28日レフェリーの審査を経て掲載決定]  
(関東学院大学経済学部講師)

---

<sup>64</sup> 帳簿の備忘録には、現金を海路でイタリアに送ったと思われる記述がある。*Debit and Credit Account Book*, c. 53r. これについては、別稿で詳しく検討したい。